



新しい人々Vのエネルギー——「六月行動月間」の提起したもの——

あの解放感をどういったらよいのだろうか。数えきれないほどさまざまなデモに参加してきたけれども、これほど解放感と奔放なエネルギーにあふれたデモのなかにいたことはこれまでになかった。六月十五日（一九六八年）、日比谷野外音楽堂。アメリカにベトナム戦争の即時全面中止を要求する「六・一五集会」。そこに一万人をこえる人びとが集まった。集会後、国会、アメリカ大使館へむけてデモ。『盛然たる』デモか警官隊への衝突かという二者択一ではなく、それぞれのグループの自主性を尊重し、他のグループの行動に介入したり妨害したりしない、また、中傷・非難はさけるが相互批判の自由は保証するというルールに基づいて、行動形態を画一化せずその多様性を最大限に認めあったこと、それがデモが自由のびのびと行なわれた一つの理由であったろう。ゆっくりと歩く部隊、ジグザグデモをする部隊、すわりこむ部隊……。

アメリカ大使館の前で、非暴力反戦行動のグループや学生六月行動委員会の学生たちがすわり込む。機動隊がおそいかかり、ごぼうぬきをするようなふりをして、あの大きな靴で、すわりこんだ青年たちを思いっきりけりつける。立ち上らせ、道端のビル側に強引に押しつけようとすると、それに続く

デモ隊が前進してその空間に再びすわりこむ。また機動隊がおそいかかる。警視庁内にある防犯協会です。売っている痴漢防止用ベルが機動隊にむかって投げこまれ、大きな音をたてている。南ベトナム解放民族戦線のマークをつけた飛行機がアメリカ大使館にむけて飛ばされる。

大通りでは、デモは自然に広がって、道幅いっぱいデモになる。伸縮自在。デモに参加した人びとは、ゆったりと大河の如く歩いた。この自由な空気はどこからきたのか。鳥合の衆の一時の群集心理だったのだろうか。労働者あり、大学生あり、主婦あり、大学の教師あり、予備校生あり、高校生あり、その他その他、それぞれこの現存秩序を何らかの意味で抑圧と受けとっているさまざまの人びとが日常生活から自己をきりはなしその重みから自由になった身軽さで浮き浮きした気分になっていたとしても、不思議ではないだろう。しかも、それは決して放縱に流れはしなかった。外からの統制によってではなく、デモのなかで一人ひとり内面的規律が生みだされたからである。

デモに参加した一万人をこえる人びとのこの自信と明るさは、自らを解放しようとする苦闘しつつ世界史に登場し、世界史をきりひらいている、ベトナム人民をはじめとする世界の新しい人民の存在と決して無縁ではなかったと思う。自覚していたと否とを問わず、この新しい人民の一票として、六月一日のデモは日本史に新しい頁を刻印したのだ。

デモの先頭がゆっくりと数寄屋橋の交差点を通過したときだった。その四つ角のビルの屋上から、赤、青、黄など色とりどりの数千万のピラがまかれた。それには、ユーモラスな表現で、こう書いてあった。

こんにちわ70年——市民・学生・労働者はたたかう！——

万国博（ANPO 70）まであと×××日となりました。これを記念して万国の労働者・学生はフランスでドイツでアメリカで（そして東欧でも）たちあがり貧困と不正の世界資本主義体制をやめるがしています。帝国主義が終焉し、自由で解放された新しい社会の夜明けに生きる私たちこそ歴史の主人公なのです。私たちは宣言します——こんにちわ70年！ さようなら安保！ 私たちは行動する、ベトナム戦争に加担するために（ベトナム人民の解放に加担するために）プロレタリアの唯一の財産である鉄鎖を打ち砕こう！ それは祖国と学問のためでなく、まさに『国家（幻の共同体）の死滅』のためなのだ。反戦反安保の六月行動は燃えるパリと連帯し、われわれ自身を解放する。

6・15「市民」解放評議会

六月一日には、報道機関によってまちまちだが、全国で「二四都道府県七〇カ所」『毎日新聞』キヤッチされない小さな行動を想像すれば、恐らく一〇〇カ所をこえる地域で、大小さまざまな行動が行なわれたに違いない。六月一日が六〇年安保闘争の際に全学連の学生だった権美智子が虐殺された日であることは、六八年のこの日の行動の意味を深く規定していると思う。砂川、成田、王子、板付、佐世保、横須賀、沖縄などの全国各基地でのたたかいに突き動かされて、この六月一日は七〇年を待たずして、日米安保条約にどうとくりくむかを赤裸々な姿でわれわれの前に提起したのだ。

ところで、六・一五をピークとした六月行動は阿部知二、小田実、古在由重、新村猛、日高六郎の五名の知識人による「六月行動月間のよびかけ」を契機として、五月一九日から六月三〇日まで、全

固いたるところで、創意あふれた多様な行動として展開された。この六月行動の直接の目的は安保問題ではなかった。「よびかけ」によれば、アメリカにベトナム戦争の即時全面中止を要求すること、ベトナム人民の民族自決権が確立されることを要求すること、日本政府の戦争加担政策の責任を追求すること、が主たるねらいだった。同時に、共同行動の新しいスタイルとルールをつくりだすことが目指されていた。といっても、それはとくに目新しいことではなく、共通の目的を支持する限り、あらゆる個人と団体が、互いにそれぞれの政治的思想的立場を尊重しながら共同の目標にむかって力を結集しよう、行動形態においても互いに多様性を尊重し共同行動の重層化を実現しよう、という至極あたりまえのことにすぎなかった。しかし、このあたりまえのことも実際に実行する段になるといろいろな障害にぶつかることになり、とくに文団連（共産党系）系の文化団体がその内部事情から独立の文団連実行委員会をつくって中途から六月行動実行委員会を抜けることになったのは誠に残念だった。この問題について、書くべきことはいろいろあるが、正直いっていまはこれ以上書く気がしない。彼らは自己の系列以外の新しいエネルギーに盲目なのであり、六月行動は既成の革新政治組織の枠からあふれでてしまった新しい人民のエネルギーを解放した点に画期的な意義があるからだ。

六月行動へのいわゆる市民団体、文化団体の参加は全国各地から二五〇をこえた。また、どの団体にも属していない個人の参加も多かった。この新しい人民のエネルギーの発現形態はさまざまな形をとっている。二、三例をあげよう。

六月行動がはじまってから、新宿へ平運をつくって参加したいが参加するのに何か資格が要るので、とか、とわざわざ電話をかけてきたおぼさんがいた。六月行動のよびかけの趣旨に賛成ならだれにでも聞かれている旨答えると、そのおぼさんはデモに参加できる人数も五名くらいしかいないけれどもそれでもいいのかと念を押した。かまいませんよ、という、それじゃ、といって電話をきった。それからしばらくして「戦争がきらいなあなたとわたし、平和を望むわたしとあなたで、新宿へ平運を大きくしていきましょう。あなたのその小さな手で、戦争のない平和な世界をつくることのできるのです」という趣旨のピラが送られてきた。さりげなく、しかしはっきりと自己の平和の意志を実現しようとする主婦たち。

また、「兵器の生産と輸送を実力で阻止しよう！」というスローガンを掲げて、関西反戦労働者連合六月行動委員会が参加してきた。具体的な攻撃目標として、大日本セルロイド（無煙火薬を製造）、日本油脂（ナバーム弾用の油、爆薬）、ダイキン工業（ロケット砲弾）、小松製作所（無反動砲、リゅう弾）、新明和工業（航空機、哨戒艇）をあげ、結果に対しての反戦運動ではなく原因に対しての反戦運動にとりくもうとする労働者たち。彼らは自己の存在条件そのものの否定へ向う最も困難なたかいを組織しようとする、いわば最もラディカルな部隊だ。

この両極の例にみられるように二つの運動主体の性格と思想的立場はそのおかれている状況に応じ、異なっているけれども、特徴的なのは、決して他人に代ってもらうことのできぬ自己の意志を直接、自らの力で実現しようとする態度である。

また、花咲かじじい作戦・落書き作戦・荷札作戦など、六月行動月間中持続的に出し続けた『姫路六月行動ニュース』で創意あふれる行動形態を提起し続けたベトナム反戦六月行動姫路会議の運動も注目に値しよう。

たとえば、花咲かじい作戦とは、ある朝、目がさめてみると、街一面に花が咲いていたというように、ベトナム反戦の大小のステッカーやポスター、チラシやビラなどを、街一面に、あるいは、一定の街通りの全面に、まるで花がいつせいに咲き出したように、びっしりと貼りめぐらそう、カベも電柱もウィンドも駐車中の車も、バス停のカンパンにも、ゴミ箱にも、何もかにもが、ビラで埋まってみえるほどに貼りめぐらそう、という提案である。こうした作戦計画は、その『ニュース』によって全国に伝えられ、全国の六月行動の創造力を刺激し、新しい創造的な行動をよびだす連鎖反応をつくりだした。

このように、既成の革新政治組織の枠からあふれてしまった新しい人々Vのエネルギーを噴出させて六月行動は終わった。しかし、これは、終りでなく何事かのはじまりであるとすれば、われわれは次に何をなすべきなのか。既成の革新政治組織の空洞化がもはや明らかであり、ある革新政治組織に属していることがそれ自体で他に対して優越性をもち得ない以上、いわば『脱藩』によって自己の所属をのりこえ、『横行』し、『横議』し、『横結』することが緊急に要請されているのではなからうか。それは自己の狭い経験を対象化しうる道であり、いまや自らが動くことによって、新しい流動状況をつくりださなければならぬ。